学び舎の光掲げむ

第50回卒業生　井上　裕子

中学生時代、僕達の学び舎それは、立江中学校だった。立江中学校は市内の中学校の中ではわりと小ぢんまりしている方だったと思う。

１学年２クラス、１クラスの人数は３０名前後。登校に始まり下校に終わるサイクルは共同生活ゆえに時間で区切られ秩序が保たれていた。僕達の時代はその指定時刻を知らせるチャイムを自分自身で管理していた。いわゆるノーチャイム制である。時間を守るために５分前行動、５分前行動と僕達は互いに言い聞かせ合うように行動したのを覚えている。

さて、僕達のクラスについて今でも印象的な事がある。それは僕達が「音」を大切にし、そしてその「音」に非常に敏感によく反応したという事だ。先生は教室の扉を開けるまでの数秒間、ある「音」をいいリズムで僕達に知らせてくれた。「もう間もなく教室に到着するぞー」と言わんばかりの足音（サイン）である。この足音（サイン）に僕達が敏感ではないはずがない。さぁいよいよ足音（サイン）が近づくと教室の四方に散らばっている仲間は一斉に何もかもを中断させ各自の机へ滑り込んだ。そして黒板の方を向き息を整えた。その俊敏さといったら見事なものである。同級生の名誉のために言っておくと全員がそうであったわけではない。しかしお世辞にも静かで大人しいとは決して言えないこのクラスを先生が知らないはずはない。だが不思議なことに先生はいい具合に見逃してくれた、教室の扉が開く数秒前までの大騒動を。見逃した理由は不明だが、どんな理由にせよ先生と僕達との間に存在する目には見えないそんな無言のやりとりが楽しかった。先生と生徒とのあの距離感は社会ではもう味わうことのできない感覚であったと思う。

印象的と言えば男子のこの会話も思い出をいきいきとさせてくれている。

「やった、やったぞ、もう丸坊主にせんでええんや！」

丁度僕達が入学する直前に長髪が許可された（男子長髪許可平成６年１月10日より）。丸坊主が嫌で嫌で堪らず、違う中学校への入学を真剣に考えた男子もいた程だ。ビッグニュースに飛び上がったのは男子だけではなかった。また女子も体操服はブルマか短パンかを選択可能となり、女子は迷わず短パンを選んだ。

このような二大改革の時代に在籍し、また世の中はゆとり教育実施に向けての議論に沸いていた。けれどもゆとり教育実施に至る一歩手前で僕達は卒業した。

カラオケもゲームセンターもましてネットカフェもなかった。懐かしい裏の天神山、隣の保育所、広がる田畑、立江川。近くの小屋には気ままに草を食べウロウロしている牛がいた。あぁ、のどかで自然に囲まれた立江中学校。勉強と部活、体育祭と文化祭、総合体育大会、青年の主張、駅伝、陸上大会、水泳大会。興味と情熱を求め苦悩しながらもそれに立ち向かい、自らの道を探し続ける若人の全てがいつもそこにはあった。あぁ、懐かしい僕達の青春、立江中学校の日々よ。

中学生時代を思い返せば、立江中学校は思い出の中にこんなにも尊くその姿を聳え立たせている。青春の空の風、大地の鼓動、沸き起こる歓声、頬を伝う汗、机の落書き、人知れぬ涙。それらとまるでそっと手を繋ぐように立江中学校は僕達の記憶の中で、学び舎の光を掲げ続けるだろう。この歌とともに・・・

一　美しの立江川辺に　集いたる若人われら
　　大いなる夢を求めて　青春のつばさ磨かむ
二　千載の生命誇りて　そびえ立つ樟の緑よ
　　限りなく強き心に　自らの道を究めむ
三　県南の文化ひらけし　堂塔の栄誉讃えつ
　　わきあがる力協せて　学び舎の光掲げむ

たとえ閉校になっても、これはお別れではない。いつまでもいつまでも僕達の学び舎であるその優しい存在を忘れることはできないから。